

## 立場によってちがう校正という仕事の認識

大野 温子

編集者を皮切りにライター、校正、レイアウトとやってきた中で、人やところが変われば校正者への認識も対応もこんなに違うのか、と感じることがしばしばあります。校正者としての年季はまだまだの私ですが、会員の皆さんにも思い当たることも多いのでは？

私が出版社に入ったのは、活字本の比率は写植より活版のほうがまだ多かった一九八〇年代初め頃です。たまに誤植を見つけては喜んで他愛ない私が驚き感心するばかりだったのが、ペテラン校正者の手によるゲラを見た時でした。かけ出しの一年生が読んでもほとんど何も気づかないゲラ、それと同じものが真っ赤になって返ってきます。割付を完全に把握した的確な赤、著者の意図を正しく読み取った上での提案のエンピツの数々。その注意力にため息すると共に、自分がいかに文章把握力、語彙、雑学的知識がないかを恥じ入ったものでした。編集部では、力量のある校正者は当然一目も二目もおかれています。もちろん当時はアバウトな私が校正の資格を取ることになるとは思ってもみませんでした。

その後、一時期出入りしたPR会社では、ディレクター（デジタル優先の編集のことです）や出入りのデザイナー、カメラマンな

どは、「校正」とは色校のことだと思っっている人が多く、カラー図版の校正にはうるさいものの、文字校正は編集とライターが見るものだという感覚でした。PRは商品売るための広告の概念ですから、インパクトとかビジュアル、要するに見た目が大事。企画書だプレゼンだとなにかと大袈裟でスタイルにこだわるのもむべなるかな、です。

また、DTPが普及してきた頃のこと。ライター集団のプロダクションに頼まれて校正に行きました。そこは中堅出版社の単行本、文庫本を毎月数点手掛けており、企画を出し原稿を揃え、デザイナーにDTPでレイアウトを頼み、内校ののちMO（光磁気ディスク）入稿、が基本の進行形式です。今まで予算の関係もあり、校正者に頼んだことがなかったとのこと。何度か重大な誤植や内容的ミス、字詰めや行数が違っていたのを見がし、出版社にお目玉を食らったので、心配なゲラを見てほしいということでした。話をしてみるとライターの数人は校正は素読みのことだと思っていられない。自分の原稿だから元原に立ち返る必要なしと思ったのでしょうか？

ですから外校に出すのも、客観的な目で文章を読んでもらう、という意味で解釈している

ようです。それはそうなんですが……。

最近DTPができて可読性を考えたエディトリアル知識がないデザイナーが増えました。長年やってきた女性商品のパンフレットがリニューアルされ、その初校を見た時は驚きました。元原は頭一字下げ、適宜改行、大、中、小見出しの別がつくように書いてあるのですが、全て無視され、ルビ用の極小の級数で一行七〇字詰めで十数行も続く本文。大きな飾り文字が地紋のように散らばりどれがタイトルか俄にはわかりません。行がはみ出してもそのページだけ版面を拡大して堂々と（！）詰めています。洋雑誌のタイポグラフィを形だけまねたのでしょうか。あまりに読みづらい箇所は恐る恐る改行マークを入れましたが受け入れられず、次の回からはあきらめました。……和田誠さんも、長年購読していた雑誌がリニューアルとともに読みにくいレイアウトになってしまったことを、コラムで嘆いていました。

信頼できる内容で、読みやすく、内容とマッチしたレイアウトの本——そんな本を作りたいと常日頃思えるのは、やはり本が好きで、文章から何かを得たいという思いのある人、本という文化の形態を尊重する人ではないでしょうか。そして出版界の中で本好き文章好きの比率が最も高い職種が校正者ではないでしょうか（？）。このデジタル時代に、校正が地味なアナログ作業（昔ながらの手作業）というのも何か象徴的な気がします。